

○春36番の発句

桃ももの日ひや女使おんなづかいのつきつきくし

琴風

〈作者について〉

作者の琴風は、摂津の人、江戸住。生玉氏または柳川氏。別号、女羅架・白鶴堂。はじめ不卜門、のち其角門。『続の原』では、句合の部に、春8番右句・夏11番右句・冬8番右句の他、発句の部に「鳴入りて何れか負ん友雲雀」など、合わせて一三句を収める。

〈語注〉

・「桃の日」によって、春。

桃の日は、桃の節句と同。三月三日の節供で、古く宮中では供え物をし、節宴を行った。平安時代より草餅で祝い、さらに中世には桃花酒を飲み、江戸時代になってひな祭りが盛んになり、餅や酒は雛段への供え物になった。

・「女使」 「おんなづかい」と読むべきであろう。ただ、「おんなづかい」の一般的な意味である「古代・中世、神社の祭りに朝廷から勅使として遣わされた内侍」では句の意味が通らない。ここでは「じよし（女使）」の意味で、単純に「女の使者」と取り、「雛の使」もしくは「上巳佳辰の贈答」のことを指していると考えられる。

・「つきづきし」 ふさわしい・物事が、ほかの物事や場面などによく調和がとれているの意。『宇津保物語』に「仲忠の侍従の、時々いますなるを、若きをのこども、つきづきしくもてなしてあらせよや」と古くから用例が確認できる。

〈句解〉

「桃の節句に、女の使がいかにもふさわしいことだ」

節句の祝儀の品を届ける使いが、女の使であることが、特に桃の節句である三月三日には、とてもふさわしく思われるとの意。

○春37番の発句

餅もちつきつきて二日ふっかを雛ひなの師走しわすかな

調柳

〈作者について〉

作者調柳については、江戸住。種田氏。初号茶瓢軒調泉。調和門。『続の原』では、句合

の部に、夏2番右を含め三句、発句の部に「花はまだ鶯聞に上野哉」など、合わせて一〇句を収める。

〈語注〉

・「雛」によつて、春。
・「餅つき」 『三代実録』（延喜元年成立）に三月三日に婦人がははこ草をとり、蒸して餅につきこむのをならわしとする記述が確認できる。三月三日に草餅を作つて食べた風習が近世まで残り、ひな祭りをするようになった江戸時代には、蓬で作つた草餅を雛段に供えていた。

師走と餅つきとの関連性は、同じ江戸時代の作品である、井原西鶴の『日本永代蔵』の巻二「この男、生まれ付きて吝きにあらず。万事の取回し、人の鑑にもなりぬべき願ひ、かほどの身代まで年とる宿に餅搗かず、忙はしき時の人遣ひ、諸道具の取置もやかましきとて、これも利勘にて、大仏の前へあつらへ、一貫目につき何程と極めける。十二月二十八日の曙、いそぎて荷ひつれ（以下略）」・巻四「ここに桔梗屋とて纒かなる染物屋の夫婦、渡世を大事に正直の頭をわらして、暫時も只居せずかせげども、毎年餅搗おそく、肴掛に鯛もなくて、春を待つ事を悔しみぬ。」などの記述から、正月の餅を師走（二月）に搗いていたことが分かる。このように雛段に供える餅も前もつて搗いていたと考えられる。

〈句解〉

「雛に供える餅を搗く三月二日は、雛にとつての師走というべきものだ」
正月の餅を師走に搗くように、雛段に供える餅も前日に搗くので、餅を搗く三月二日は雛にとつて師走のようなものであろうの意。

○春38番の発句

ひなうり
雛賣はゆかしき戀のよすか哉

立些

〈作者について〉

作者の立些については、生没年ほか未詳。『続の原』では、句合わせの部に、春9番右句・夏4番左句・冬6番右句の他、発句の部に一〇句を収める。

〈語注〉

・「雛賣」によつて、春。
・雛売りは、『続飛鳥川』（文化七年成立）に「二月末雛賣、二人連にて来る。賣聲、乗物ほがい雛の道具内裏びな小人形、天明の頃、乗ほがい雛の道具ばかり賣に来る。寛政の頃より不_レ來」とあり、ほかにも、『宝曆現来集 卷之二』（天保二年成立）に雛売りに関する

記述が確認できる。以上の随筆における雛売りの説明から推測すると、当時の雛売りは箱に人形を入れて売っていたこと、そして一般的な雛人形と比べて安く買うことができたことが分かる。

- ・「ゆかしい」 なつかしい、恋しい、慕わしいの意。
- ・「よすが」 身や心を寄せて頼りとする事。

〈句解〉

「雛売りは心ひかれる恋の仲立ちである」

雛売りは、女の子がいる家には必ず寄っていたと推測されるが、それを知り、前もって準備していた恋文を伝えてくれるようお願いしたとの状況が想像できる句である。

※句の解釈において、雛人形は内裏雛であって、片方を失くした後、雛売りから新しい人形を買ってもらった状況が想像でき、ここで雛売りは内裏雛の仲立ちと解釈するべきといった意見が出された。

○春39番の発句

汐干とやすく藻に舍るもろ雲雀

不角

〈作者について〉

作者不角は、立羽氏。通称、定之助。初号、遠山。不卜門。『続の原』には、句合の部に、春3番右句など四句が収められ、発句の部に「燕の巢に見えそめし董哉」など、合わせて一〇句を収める。

〈語注〉

・「雲雀」によって、春。

※『増山の井』（寛文三年成立）において「土佐塩干」が三月三日に「土佐の海に硯石とる」として所出し、「汐干に取るなり」と注記されていることや、『花花草』（寛永一三年成立）で「住吉の潮干」が三月として初出していることから、この句の季語を雲雀のほか、「汐干」とも考えられる。

・「汐干」 潮干・汐干狩と同。陰暦三月三日ごろは大潮で、一年中で一番潮の干満が大きく、砂浜、磯浜も遠くまで干上がる。町の人々はこの時に貝掘りや、潮だまりに残ったさ魚や藻などを採って一日を楽しんでいた。江戸では、品川沖や芝浦沖など昔は汐干の名所であった。

・「すく藻」は、「葦・茅などの枯れたもの」の総称。

〈句解〉

「潮干狩りをしているとでもいうのか、すくもに集まった雲雀たちが盛んに餌をあさっていることだよ」

群れ集まって餌をあさる雲雀の様子を人々の潮干狩りのさまと見立てた。

○春40番の発句

あさつきのあかるゝを身るみの仕業しわざ哉

李下

〈作者〉

作者李下は、江戸の人。芭蕉の深川草庵に芭蕉一株を送り、それより庵の名とする。蕉門。『虚栗』『あら野』『続猿蓑』などに入集。『続の原』には、春40番の発句以外に、句合わせの部に、冬9番左句が収められ、合わせて二句を収める。

〈語注〉

・「あさつき」によって、春。

「あさつき」は『毛吹草』（正保二年成立）に二月として所出。『増山の井』『水鏡』（享保一五年成立）には三月とする。

『五節句』（元禄元年成立）に「あさつき脛」が三月として所出。『手桃灯』（延享二年成立）では「あさつき」を二月、「あさつき脛」を三月とする。春40番の発句以前の句がひな祭りなど三月の行事に関する発句であることや、「あさつき脛」が、早春の食べ物で、あさつきと汐干狩で採ったものであろうあさりのむきみや魚類などを、酔味噌であえたものであることを考えると、春40番の発句で「あさつき」は、「あさつき脛」と想定できるのではないか。

・「仕業」 もっぱらそのことを行うこと。仕事。

〈句解〉

「あさつきに飽きられてしまったのは、調理する私のせいであるよ」

早春の食べ物であるあさつきを食卓にあげ続け、飽きられてしまったことを、「あかるる」「身」など恋の歌の伝統を持つ語で読んだ点に可笑しみが感じられる。